

第 49 回 国際経済協力セミナー

開発援助手法をめぐる論争と行動科学：「我々」と「彼ら」の行動を理解しよう

講演者：加藤真紀氏

横浜国立大学 研究戦略推進本部 准教授

文責・草案作成：佐久間翔



横浜国立大学准教授の加藤真紀氏をお招きし、開発援助についての異なった立場からの見方、それらの間でなされてきた論争の概略、開発援助における援助側と被援助側の行動様式について興味深いお話を伺った。受講生も積極的に議論に加わり、活発な議論が展開された。

1. 自己紹介

- 経歴はいくつかの専門を渡り歩いてこられた。こういった経歴をもった人間は日本で少数派である。
 - 学部では行動科学の教育心理学を、大学院修士では社会学の国際教育開発を、

大学院博士では経済学の計量経済を専門とされてきた。

- この変遷を端的にまとめるならば、対象としてはマイクロ（個人）からマクロ（国）へ、内容としては教育を通じた人間の成長から社会開発・知識の創造・普及へという流れになる。それぞれの段階において、ご自身の興味に応じて柔軟に専門を渡り歩いてこられた。
- 以上の専門遍歴を生かし、以降の講演で心理学と国際開発・経済学の面から開発援助手法の論争を俯瞰してゆく。

2. 開発援助手法をめぐる論争

- 開発援助の手法をめぐる論争では、主に以下三つの立場に分かれ議論が交わされてきた。
 - 貧困を一挙に解消する「ビックプラン」（コロンビア大学地球研究所所長 Jeffrey David Sachs が中心）
 - ✓ 主張：最貧国は貧困の罠に捕われている。大規模な援助（ビックプッシュ）が有効。
 - ✓ 分析手法：マクロ経済分析
 - インセンティブに基づく「自由市場」（ニューヨーク大学教授 William Easterly が中心）
 - ✓ 主張：貧困の罠はなく、開発は人々のインセンティブに基づいた市場にゆだねるべき。「計画するという発想」が間違いである。
 - ✓ 分析手法：マクロ経済分析
 - ミクロデータを基にした「行動科学」（MIT 教授 Abhijit Banerjee, Esther Duflo が中心）
 - ✓ 主張：開発援助や貧困の問題は調査研究に基づきエビデンスベースで解決されるべきだ。途上国の経済開発がうまくいかないのは、政策設計における無知、イデオロギー、惰性のせいである。
 - ✓ 分析手法：ミクロ経済分析
- 蚊帳を例に、主張の違いを具体的に比較してみる。
 - 大前提…蚊帳は役に立つ。
 - ✓ 蚊を媒体とするマラリアによる死者は、2008 年には約 100 万人、2011 年には約 65 万人と被害が甚大。

- ✓ 殺虫剤処理をした蚊帳を使用すれば、たとえ感染してもマラリアの症状を半減させることが可能。
- ✓ 感染症であるマラリアは蚊帳の使用によって本人の感染リスクを下げることができるのみではなく、他人の感染リスクも下げられる（外部効果がある）。
- ✓ 一つ 10 ドルほどで求めることが可能。
- では援助側は、この蚊帳をどうするのがよいか？
 - ✓ サックス…無料であげるべきだ。マラリアの被害が大きい地域は最貧国が多く 10 ドルでも高い。保健への投資効果は高い。
 - ✓ イースタリー…無料であげるべきではない。無料でもらうものには価値を見出さず使われない。もらうことになれば自ら購入しない。本人のインセンティブが重要だ。
 - ✓ バナジー&デュフロ…この問題に答えるためには、値段・購買態度・使用の関係を分析してエビデンスを収集することがまず必要だ。
- 頭脳流出を例に、主張の違いを具体的に比較してみる。
 - 命題…ある国からの頭脳流出は、その国の教育を改善させるのだろうか？
 - ✓ 国際移動インセンティブ説…将来の海外への移動を目指して、人々は教育に投資するはずだ。資本の流動は一方向であるし、国家間の所得格差も拡大している。
 - ✓ 懐疑説…このようなインセンティブのみによって改善される部分は少ないだろう。教育自体へのアクセスが改善されても、質の面などで問題が残る。

3. 「我々」と「彼ら」の行動科学

- 「我々」「彼ら」はしばしば以下のように用いられる。
 - 我々…先進国の人々、富裕国の専門家、開発援助者、白人
 - 彼ら…途上国の人々、開発被援助者、有色人種
- 我々から見ると合理的に見えない彼らの行動にも、彼ら独自の理由がある。その理由や行動を規定・変化させる要因を理解することが我々には必要。
- これは開発経済学に限らないが、「我々」はわかりやすく一貫性のあるようなストーリーを求める傾向にあり、結果を無批判に受け入れがちである。メディアの影響も大きい。このような傾向があることに常に意識的である必要がある。